

第 36 回 医学教育指導者フォーラム 開催要綱

趣 旨	大学医学部における医学教育の改善並びに教育研究組織の円滑な管理運営に資するため、医学教育について責任ある立場にある方の参加を得て、医学教育の様々な問題について情報の交換並びに討論を行う。
主 題	臨床現場における学習者評価
主 催	公益財団法人 医学教育振興財団
期 日	令和 7 年 7 月 15 日 (火)
開催方式	対面・オンライン (Zoom Webinar)
会 場	帝京大学板橋キャンパス臨床大講堂 (本部棟 2 階) 173-8605 東京都板橋区加賀 2-11-1
参 加 者	国公私立医科大学学長、医学部長、医学部附属病院長及び教務委員長等

日 程

12:45	受 付	進行) 医学教育振興財団事務局長 和氣 太司
13:00	開 会	〈開 会 挨 拶〉 医学教育振興財団理事長 小川 秀興 〈挨 拶〉 文部科学省高等教育局医学教育課長 日比 謙一郎 〈会場校挨拶〉 帝京大学副学長 冲永 寛子
13:10	講演 1	The Evolution of Workplace-Based Assessment Research Professor in Psychiatry, SUNY Upstate Medical University President Emeritus of the Foundation for Advancement of International Medical Education and Research John Norcini 司会) 医学教育振興財団常務理事 北村 聖 〈質疑応答 15 分〉
14:10	講演 2	Making Workplace-based assessment work Professor, School of Health professions Education, Maastricht University Erik Driessen 司会) 国際医療福祉大学国際医療者教育学教授 (代表)・感染症学教授 矢野 晴美 〈質疑応答 15 分〉
15:10	休憩 (15 分)	
15:25	総合討論 「臨床現場における学習者評価」	司会) 名古屋大学総合医学教育センター教授 錦織 宏 ・ 話題提供 「高等教育における観察評価とその周辺」 斎藤 有吾 新潟大学教育基盤機構 教学マネジメント部門 准教授 「医学生の臨床技能評価 mini-CEX および症例プレゼンテーション評価」 大久保 由美子 帝京大学医学部教授・医学教育センター長 「mini-CEX の導入経緯と総括評価への位置づけ」 菊川 誠 九州大学大学院医学研究院 医学教育学講座准教授 ・ 討論 パネリスト：斎藤、大久保、菊川、Norcini、Driessen
16:55	閉 会	〈閉会挨拶〉 医学教育振興財団常務理事 栗原 敏
17:00	終 了	

臨床現場における学習者評価（趣旨と背景）

名古屋大学総合医学教育センター教授

錦織 宏

臨床教育における評価を検討する際に、しばしば引用されるのが 1990 年に提唱された Miller のピラミッドである。Knows/Knows How/Shows/Does の四つのレベルにわけて学修者評価を検討することを提案したこのモデルから、「知っていることはできることを保証しない」という学修者評価の基本的な考え方が理解できる。また総括評価という視点では、数百問の多選択肢式問題から構成される現在の日本の医師国家試験がしばしば妥当性の観点から批判を受けるが、その理由についても Miller のピラミッドを基盤に考えると了解可能である。臨床現場で医師・研修医・医学生には実際に「できる」ことが求められるわけだが、現在の、特に卒前医学教育において、「できるかどうか？」の評価は、系統的かつ総括的には十分に実施されていない。

では実際、臨床医・指導医はどのようにして現場で、医学生や研修医、若手医師が「できるかどうか？」の評価を行っているのだろうか？「一緒に働けばわかる」という言葉が現場からはしばしば聞かれるが、その意味するところは、臨床現場における観察評価、すなわち WBA(Workplace-Based Assessment)の重要性である。医学教育学分野においては、1990 年代から WBA の研究が盛んになってきている。また 2023 年の本フォーラムでも話題にあがったが、米国では医師国家試験で OSCE(Objective Structured Clinical Examination)を廃止し、WBA が広く用いられるようになってきている。これらの研究の最新の知見や近年の世界の動向を紹介して、我が国における WBA の今後のあり方を検討することが、本フォーラムの目的である。

医学教育に関わる幅広い関係者に参加してもらうため、本年もハイブリッドの開催とした。海外演者による講演として、まず FAIMER(Foundation for Advancement of International Medical Education and Research)の名誉会長であり、また Mini-CEX(Clinical Evaluation Exercise)の開発者でもある John Norcini 先生に、主に米国の文脈で、WBA のこれまでの発展の歴史についてお話いただく。また、マーストリヒト大学の医療者教育学分野の教授であり、国際雑誌 PME(Perspective on Medical Education)の編集委員長も務められる Erik Driessen 先生には、主に蘭国の文脈で、ポートフォリオ評価にも触れつつ、WBA の実装についてのお話をいただく。総合討論では、斎藤有吾先生には高等教育学分野における WBA の最近の動向についてお話いただき、大久保由美子先生および菊川誠先生には日本の卒前教育において WBA を展開したご経験を共有いただき、全体討論につなげる。

近年、診療参加型臨床実習の実質化が医学教育における主要な話題となっている。本フォーラムでもここ3年、「Student doctor のための診療参加型臨床実習」、「OSCE 再訪」、「医師法改正後の診療参加型臨床実習」と、臨床実習に関連のあるテーマを取り上げてきた。本年は学修者評価に焦点を当て、診療参加型臨床実習の実質化に関して、より俯瞰的な議論ができることを期待している。